

「専門資料の流通と利用」

★本日のねらい：研究活動の中での専門資料の流通・利用のあり方，またそこでの図書館の役割について説明する。専門資料の「探索」の仕方についても説明する。

◆研究におけるコミュニケーションの2つのかたち

(1) _____ なコミュニケーション：研究者の仲間どうして直接行われるコミュニケーション過程。図書館は介入できない。会議での口頭発表，プレプリントや抜刷の受け渡しなどの形で実施。

(2) _____ なコミュニケーション：「資料」を介して行われるコミュニケーション過程。図書館が介入できる。論文，書籍など「一次資料」の発表によって実施。

※研究者としては両者のコミュニケーション過程を活用する必要がある。

→(1)は迅速さ，(2)は正確さと研究の構造（特に文献の引用）を重視。

(2)を支えるものとして図書館が存在する。

◆専門資料の利用法（情報探索の方法） (4)(5)は井上『図書館に訊け！』p.123-126 参照

(3) _____ : 情報を探している時点では，探すべき情報が何かというのは分からない。しかし，偶然に有益な情報を得ること，また発想転換への刺激を得ることを求めて，資料などに次々と目を通すこと。

・図書館に置かれた資料，書籍・雑誌に収録された論文などが，(3)の対象になる。

(4) _____ : 特定の文献の中で「引用文献」「参考文献」として挙げられたものを次々と探っていくこと。

(5) _____ : 「二次資料」（書誌，目録，索引やそれに対応したデータベースなど）を用いて，必要な文献を探すこと

※ 別の角度からの(3)(4)(5)の検討：千野信浩『図書館を使い倒す！』（新潮新書，2005）より

図書館を「使い倒す」（使いこなす）ためのコツ：2つの方法の使い分け。

・「あいまいな探索」：あるテーマについてどんな資料があるか分からない場合，(3)によって関連のありそうな資料を探す。

・「鋭い探索」：欲しい資料が分かっている場合には，(5)を使って資料を探し出し，その資料が確実にある図書館に行く（あるいは，(6) _____ によって資料を手に入れる）。

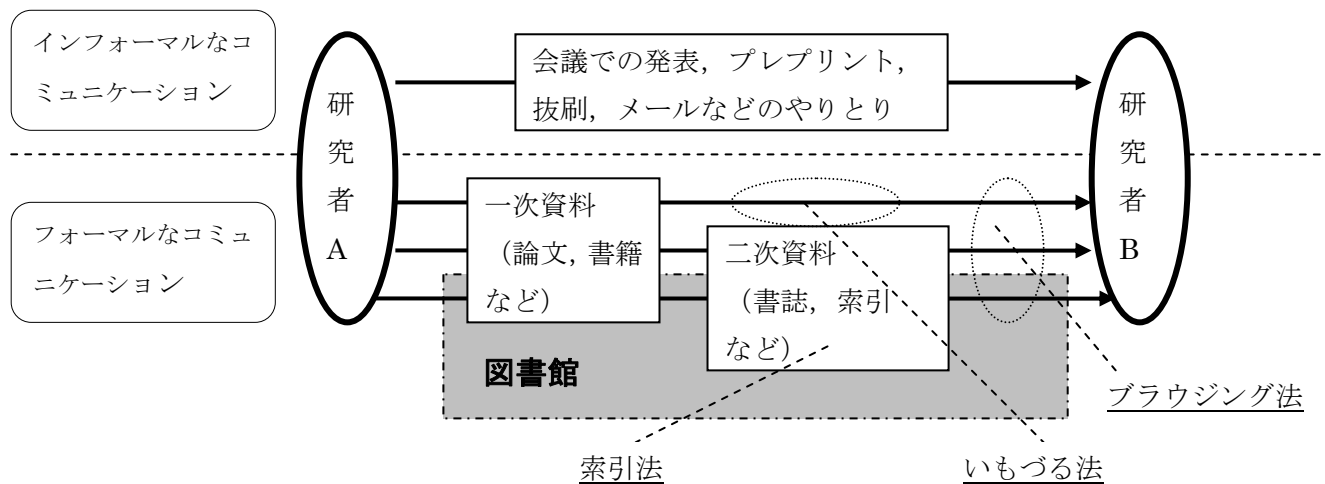
（これらと(4)を組み合わせる必要もある）

* (3)(4)(5)の長所・短所

情報探索の方法	長所	短所
ブラウジング法	<ul style="list-style-type: none"> 新たな発想が得られる。 	<ul style="list-style-type: none"> (7) _____ に依存する余地が大きい。
いもづる法	<ul style="list-style-type: none"> 特定のテーマについて多くの文献を見ていけば、「多く引用されている文献」イコール「重要な文献」がおのずと分かる。 特定の文脈の中で引用された文献の位置づけ・意味合いが分かる。 	<ul style="list-style-type: none"> 同上
索引法	<ul style="list-style-type: none"> 特定のテーマ・条件に合った文献を効率よく拾い上げることができる。 	<ul style="list-style-type: none"> 「二次資料」の特徴や限界を理解する必要がある。

※3つの方法とも「見落とし」「漏れ」があり得るので、3つを組み合わせて必要な情報を見つけるようにする。

◆ 以上のまとめ (研究者Aは生産者, 研究者Bは利用者)



◆それぞれの領域で、どのような資料が求められるのか

*人文科学、社会科学の場合、研究の成果としての「専門資料」とは別に、(8)_____の「対象」(研究の素材)となる文献が求められる場合がある。(広い意味では、「読解対象」も「専門資料」に含める。)

・具体的な(8)の対象とは：文学作品、法情報（法律の条文や判例）、政府刊行物（議事録、白書、統計資料）など。

・研究の成果としての専門資料は、読解の「方法」を教える。

*理系では文系のような「読解対象」はない。論文など「専門資料」の内容を参考にしながら、(9)_____を行う。(同様に、社会科学における(10)_____の方法も、「専門資料」が手がかりとなりうる。)

↓

専門資料は、研究の成果であるとともに、研究の方法を教えるもの。

(第2回の授業で述べた「学术论文の作者はその読者でもある」の意味はここにある。)

◆ インターネットの検索エンジンや、データベースの限界を知る

*「あいまいな検索」ができるか否か (下の図を参照)

・図書館の書棚では、所蔵している資料の全体（および個々の資料の主題ごとのまとまり）を見渡すことができる。：「主題ごとのまとまり」は分類法によって可能となっている。

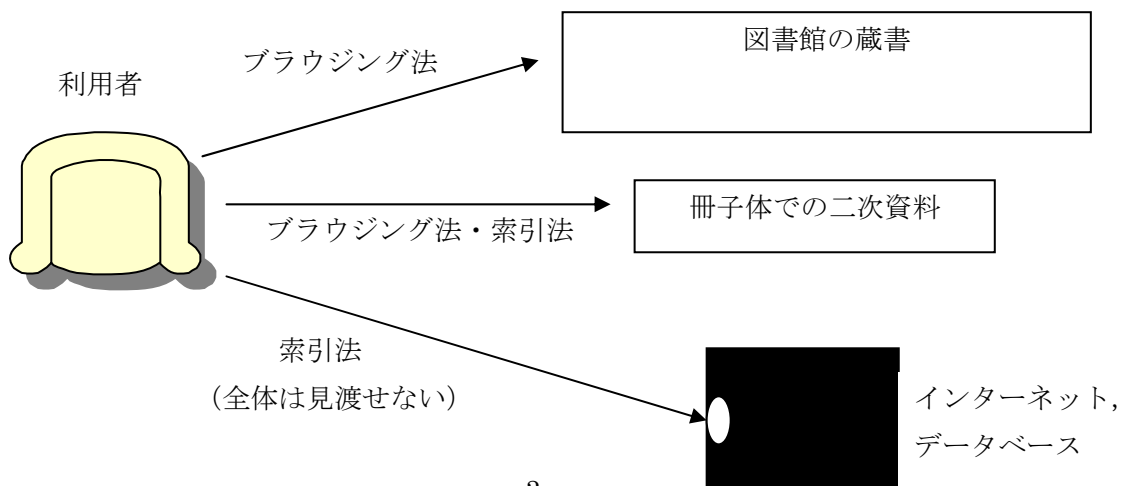
・また、冊子体の二次資料（書誌、目録、索引）でも、「索引法」のみならず、冊子体に収められた範囲内での「ブラウジング」「あいまいな検索」を可能とする。(そこに収められた文献が、身近な図書館にあるかどうかは別として)

↓

・インターネットの検索エンジンや、データベースでは、「索引法」によって特定のことに合った資料や情報を拾い上げることができるが、資料の全体を見渡すことができない。

・特に検索エンジンの場合、(11)_____（書名・論文名や著者名には必ずしも現れない）あるいは「文脈」に沿った探索には弱い。

【図】



*その一方…

インターネットやデータベースでは、データの(12)_____については柔軟性がある。しかし冊子体の二次文献では、データは固定してしまっている。

◆ 専門資料の入手（紙のものもネット上のものも）を助ける、図書館の役割は？—いくつかの例

その1 資料の所在を示し、また(13)_____を助ける。

- ・(14)_____が重要な役割を担う。具体的な仕組みは下記の通り。

- ・(15)_____（国立情報学研究所） <http://webcatplus.nii.ac.jp/>
- ・(14)の機能をもつデータベース。つまり、どの本・雑誌が、どの大学図書館に所蔵されているか、を確認できる。ここで所蔵を確認できれば、東洋大図書館にない本・雑誌でも(13)で利用が可能。
- ・「連想検索」機能がある：検索語と関連しそうな資料を探し出す。（ネット上の新聞記事などをコピーし検索画面に貼り付け、検索するとよい）
- ・通常の OPAC と同様、書名や著者名などから検索できる「一致検索」機能もある。

- ・(関連)「東京都の図書館 横断検索」 <http://metro.tokyo.opac.jp/>
- ・都のレベルでの(14)データベース。都内のどの図書館にどんな図書があるか、まとめて検索できる。他の道府県にも同様のデータベースあり。（下に例を挙げる）
- ・千葉県：<http://www.library.pref.chiba.jp/agent/>
- ・神奈川県：<http://www.klnet.pref.kanagawa.jp/opac/CrossServlet>
- ・埼玉県：<http://cross.lib.pref.saitama.jp/>

その2 図書館ウェブサイトにおける主題ごとの情報源の編成。

・前回紹介した、東洋大図書館の「情報検索ポータル」、東京大学図書館の「インターネット学術情報インデックス」など。

その3 (16) _____ の作成。

・(16)とは：あるテーマを一例として、資料探索方法と自館所蔵の関連する基礎資料を、簡潔にまとめた主題案内。

- ・「リーフレット」（チラシ）の形でもよいが、ウェブ上に作成すると効果的。
- ・日本の大学図書館が、近年力を入れている取り組みのひとつ。（ウェブ上での(16)の作成）
総合的情報源として、「パスファインダーバンク」（私立大学図書館協会東地区部会 企画広報研究分科会 <http://www.jaspul.org/e-kenkyu/kikaku/pfb/>）がある。
- ・大学図書館以外にも、以下の例がある。
 - ・「テーマ別に調べるには」（東京都立図書館） <http://www.library.metro.tokyo.jp/16/16300.html>
「人物情報」「企業情報」「翻訳書」などのテーマに関するパスファインダー。
 - ・「テーマ別調べ案内」（国立国会図書館） <http://www.ndl.go.jp/jp/data/theme.html>
都立図書館のものに比べると、細かいテーマも扱っている。（「繊維・アパレル」「外食」などの産業分野別の情報の調べ方など）

【次回予告】 時間に注意！ 12/19（火）19：50～

- ・ビデオ鑑賞を通じて、「研究活動と専門資料の関わり合い」を復習し、また研究活動の問題点についての理解を促す。
- ・この日までに、レポートを提出すること（直接、またはメールで）。